80年代以降の「ノンフィクション」状況
―「リテラリー・ジャーナリズム」,「アカデミック・ジャーナリズム」の展開について―

武　田　　徹

The Circumstances of Non-fiction Writing in Japan After the 1980's

Toru Takeda

Abstract

The Japanese society after the 1980's became very complex and totally impossible for conventional non-fiction authors to work on. In order to fill in this gap, novelists and university researchers began to produce reports. In this thesis, an attempt is made to discuss such trials which can be referred to as 'literary journalism', by referring to the works by Yasuo Tanaka, which captures the growth of the consumer society, and "mobile phone novels" which are a collection of stories about those who are at the bottom of the social strata from their own point of views. Also, this thesis takes into considerations what has been achieved by 'academic journalism', referring to the works by Furuichi Noritoshi who argues about the increasing tendency of mutual dependencies among the younger generation, and finally by Hiroshi Kainuma who addresses the issues of internal colonization found especially characteristic in the nuclear power plant areas.

Keywords：non-fiction, literary journalism, academic journalism, Chicago school (sociology), mobile phone novel

キーワード：ノンフィクション，リテラリー・ジャーナリズム，アカデミック・ジャーナリズム，シカゴ学派（社会学），ケータイ小説

筆者はかつて「「ノンフィクション」の生成――筑摩書房版『世界ノンフィクション全集』の史的位置づけ」（武田2011），「「ノンフィクション」は社会科学の方法たりえるか――「ニュージャーナリズム」期前後の沢木耕太郎の作品分析を通じて」（ibid. 2010）での論考を通じ，日本のジャーナリズム史において「ノンフィクション」というジャンル概念が成立したのが60年代であり，それが現在のように専業「ノンフィクションライター」によって書かれる文芸的ジャーナリズム作品を指示するかたちに収束してゆくプロセスが70年代にありえたことを示した。

こうして成立した「ノンフィクション」という調査・表現の方法は80年代になると一定の「芸風」として固定され，現実の多様性に対応できなくなる弊害を早くも示し始める。このように「ノンフィクション」が時代の最先端の動きをフォローできなくなって生じた空隙を埋めたのはむしろ「ノンフィクション」以外のジャンルの作品だった。

まずひとつに文学の側からのアプローチがあった。これは文学的作品性を備えたジャーナリズムである「リテラリー・ジャーナリズム」の日本独自の発展を用意した。もうひとつはアカデミズムの側からのアプローチ，つまりアカデミズムで鍛えられた概念と分析装置を駆使して複雑化する現実に対峙しようとする動きがあった。本論文はこうした「リテラリー・ジャーナリズム」と「アカデミック・ジャーナリズム」が，従来の「ノンフィクション」を補って変動する社会の輪郭を描き，問題提起機能を持った80年代以降のジャーナリズム状況について概観する。

１．日本のリテラリー・ジャーナリズム

１－１『なんとなく，クリスタル』

第17回文藝賞を1980年に獲得し，翌年に単行本化された『なんとなく，クリスタル』という作品がある。著者の田中康夫は当時，一橋大学法学部５年生であり，雑誌のモデルをしているほぼ同世代の女子大生を主人公に据えて80年当時の若者の生活を描いた。石原慎太郎以来の現役一橋大学生の小説として話題を呼んだ同作品に対しては毀誉褒貶があった。多くの文芸評論家はその心理描写が浅く，情景描写も不十分で文芸作品として見るべきものはないと切り捨てた。その一方で高く評価したのが，文藝賞の選考委員を務めていた江藤淳であった。選評に江藤はこう書いている。

なかでも田中康夫氏の「なんとなく，クリスタル」は斬新さという点では四篇中右に出るものがない。気障な片仮名名前のコラージュの中に，「ナウい」女の子を登場させて，しかも，〝惚れた殿御に抱かれりゃ濡れる，惚れぬ男に濡れもせず，とでもいうべき古風な情緒で「まとめてみた」点は，まことに才気煥発，往年の石原慎太郎と庄司薫を足して二で割った趣きがある。後世畏るべしというほかあるまい（江藤1980）

しかし，ここまで田中の才能を褒めていながら，実は江藤は彼の作品を純文学として読んでいなかったようにも感じられる。彼が褒めているのは，そこに盛り込まれた批評精神なのだ。「この小説につけられた274個[1)]の注は，『なんとなく』と『クリスタル』のあいだに『,』を打ったのと同じ作者の批評精神の現れで，小説の世界を世代的，地域的サブカルチャーの域に堕せしめないための工夫である」（ibid.）

戦後日本が獲得した豊かさは，占領政策の延長上にサンフランシスコ条約と安保条約を締結し，対米従属の枠組みの中で軽武装，経済重点化の道を選んだ結果だ。それでは日本の真の自立は遠いと江藤は考えていた。そして自分たちが獲得した豊かさ，それをただ「なんとなく」受け入れていて良いのかという躊躇がその「,」に示されていると推測した江藤は，田中を同志と見込んだのだ。

それは江藤の牽強付会だったのか。そこで江藤が「,」と共に注目した274個の「注」についても検討してみよう。主に小説中に登場するブランドネームやおしゃれなスポットに対して注は付けられており，それを知らない読者への配慮を示すとともに，田中独自の解釈も加えられ，ウィットを感じさせるが，江藤は蓮實重彦との対談の中で，それ以上の意味づけをしている。

いまの東京のいったいどこに，都市空間などというものがあるのだろうか。そんなものがもはや存在していないことを，完膚なきまでに残酷に描き切ったところが，田中康夫の『なんとなく，クリスタル』の新鮮さではなかったのか。田中君は，東京の都市空間が崩壊し，単なる記号の集積と化したということを見て取り，その記号の一つ一つに丹念に注をつけるというかたちで，辛くもあの小説を社会化することに成功しているではないか。（江藤

・蓮實1985：119）

江藤は『なんとなく，クリスタル』がリアリティを仮構する小説である以上に，リアルな現実を指示する「ノンフィクション」作品的な価値を担っていると考える。

そんな田中の作風とよく似た作品がある。ジョルジュ・ペレックの『物の時代』だ。1936年生まれのペレックは　同作で65年に文学賞であるルノドー賞を受賞。弱冠29歳にしてデビューした早熟ぶりも田中と似ている。田中がその作品を実際に読んだのか，更にそこから影響を受けていたのかは，本人の証言が残されていない。ただひとつ，興味深い符合がある。ペレックの小説は冒頭にマルカム・ローリの『活火山の下』（原書邦訳ではマルカム・ラウリーと表記されている）からの引用が引かれている。

> 文明がわわれわれにもたらした恩恵は計り知れず，科学の発明発見によって生じたあらゆる種類の富の生産力は限りを知らない。人間をより幸福に，より自由に，そしてより完全にするための人類のすばらしい創造は数えきれないほどだ。こうした滾滾とわき出る新生活の清澄な泉はたぐいなく豊かであるが，しかしその泉も，獣のような過酷な労働に従事している人びとの乾いた唇にはいまだ閉ざされたままだ。（ペレック2013：７）

注目すべきは「新生活の清澄な泉」の箇所である。翻訳からは想像しにくいが『活火山の下』のこの部分の原語は　the crystalline and fecund fountains of the new life なのだ。田中が選んだ「クリスタル」という形容は，ただ高価なブランド品にまみれた＝キラキラしたイメージを示した造語だと思われることが多かった。しかし，ペレックの小説に田中が目を通し，更にその巻頭に置かれたマルカム・ローリの惹句の原典にまで遡って「クリスタルな生活」という言葉を得ていた可能性は排除できない。

その真偽の確定は本論文の目的から逸れるが，少なくとも『なんとなく，クリスタル』はペレックの小説が書かれた65年からの時間の堆積を意識して解釈した方が，実り多いことをここでは示したい。

『物の時代』はまさにタイトル通り「物」を中心に展開される物語とな

る。主人公であるジェロームとシルヴィのカップルは，広告業界で働き，物を所有したいという欲望に強く因われている。たとえば小説で夫婦が住むアパートはこんな風に描写される。

> すべては茶色か，代赭色，鹿子色，あるいは黄色に統一されるだろう。それは慎重に，いささか気取って配色された少し古風な色調の世界であるが，その真ん中にはクッションのややはでなオレンジや，装釘本の中に混じった雑多な色の背表紙などもっと明るい色彩が点在していて，それが人目を驚かすだろう。昼間，光がふんだんに入ってくると，この部屋は薔薇の花があるのに，少し淋しい感じになるだろう。ここはむしろ夜の部屋だ。冬の宵，カーテンをおろし，いくつかの光の斑点――木箱のある一隅，レコード入れ，書きもの机，二つのソファーの間の低いテーブル，鏡に映るぼんやりとした物影など――と，磨き込んだ木肌，どっしりとした豪華な絹地，カット・グラス，柔らかな革などすべてものが光っている広い暗闇の中に身を置くと，それは安らぎの港，幸福の地になるだろう。（ペレック2013：13）

彼らのパリ生活を紹介する書き出しは，こうして延々と続く「物」の羅列で綴られる。しかし，その描写が原文ではすべて条件法現在で書かれている点は留意に値しよう。即ち，ここまで書き連ねられた「物」に満ちた生活は「もし出来ることなら」という条件節を背景に控えさせた，あくまでも主人公達の「夢」の中の世界なのだ。そして，すぐ後に続くパラグラフによって作者は，主人公達と共に夢みがちな読者を現実の中につき落とす。「金持ちになりたい，金持ちなったらきっとそれにふさわしい身の処し方ができるだろう，と二人は思っていた」（ibid.：20）。この箇所で時制は条件法過去に転じる。即ち「過去において，そういう夢をもっていたのだが，それは今に至っても実現されなかった」ことが告げられる。この夢と現実の乖離が主人公たちを苛む。「金持ちでは無論ないが，さりとてそれほども貧しくもないが故に金持ちになりたいと願っているこの若い夫婦にとって，これほど居心地のわるい状態はなかった。彼らが持っているのは分相応なものだけだった」。（ibid.：20f）

こうして分相応では満ち足りず，所有の夢を見続ける主人公達に対してペ

レックは厳しく批判的である。一度「もの」に魅了された者には救いは訪れない。そこに示されているのは〈「物」か，自由か〉という二分法だ。

では『なんとなく，クリスタル』はどうか。そこに興味深い差異がある。ペレックの作品で登場する「物」は「クッション」「カーテン」「木箱」「ソファ」など普通名詞だった。ところが田中康夫が登場させるのはブランド名などの固有名だ。この変化は何を意味するのか。

１－２　書かれた言葉と現実世界

ペレックの『物の時代』が書かれた二年後，記号学者ロラン・バルトは「物」の名前を文章の中に持ち込む作法を分析した。『モードの体系』で『エル』『ヴォーグ』といったファッション雑誌の文章を引いたバルトはその文章には２通りあると考える。

①「競馬場ではプリント模様が全盛です」

この文章で意味されていることは現実に競馬場に赴けば，プリント地の衣服をしばしば見掛けられるという事実である。そこでは現実と衣服の関係が示される（バルト1972：cf. 55f)。ところがファッション雑誌の文章はこのタイプだけに留まらない。バルトが挙げるもうひとつのタイプは，こんな例だ。

②「ヴェスト・ブラシエール，背中がすっかりボタン止めになっており，えりは小さなスカーフのように結ばれます」

こちらの文章では，一切，現実と衣服の関係が語られていない。全てが衣服の描写で尽くされている。しかしファッション雑誌という枠の中で②の文章が書かれた場合，語られずして暗示される内容がある。それはここで記された衣服がア・ラ・モード（流行している）ということだ。（この時点では）背中がボタン留めになっているヴェスト・ブラシエール（胸衣）が流行しており，たとえば，そこに記されていない前ボタンのヴェストや，被って着るタイプのヴェストは流行していないという内容をその文章は意味している（ibid.：cf. 58ff)。これは衣服とモードの関係を示す表現だ。

しかしバルトが67年当時に文例を引いた『ヴォーグ』誌の最近の号を手繰れば，①②以外の文例をすぐに目にすることができよう。たとえば夏の避暑地風の写真の横に添えられるキャプションにはこんな表現が使われている。

③「ラルフローレン・ポロの丸首コットン・プルオーヴァー」

この文章はスタイル的には②のタイプに属している。すなわちプルオーヴァーが流行している（＝ア・ラ・モードだ）ということを暗に意味する。しかし，そこにはプルオーヴァーという普通名詞だけではなく，固有のブランド名が登場する。こうして，ただモードの如何を一般的に記述することを超えて現実との回路が開かれる。③の文章はラルフローレン・ポロの衣服という具体的実在物を示し，それが流行しているのだからと購買と着用を読者に勧める（武田1989：cf. 115f）。

③の文章で，ブランドという記号は，ヤコブソンの用語を借りれば，ア・ラ・モードであるという流行のコードと具体的な商品のコードをつなぐシフター（転換子）として使われている。特定商品が流行していると示して，その購買を勧めるシフター記号を含む③の文章が，雑誌メディアの記事ページに盛んに侵入する。これが『物の時代』や『モードの体系』が書かれた60年代の後に資本主義世界で起きた変化だ。それは雑誌メディアの変化だけに留まらない。たとえば北田暁大はパルコ資本によって渋谷の街全体が広告都市化（「都市の中に広告があるのではない。むしろ都市そのものが広告であり，広告でないものが存在しない」（北田2011：68））する変化を追っている。そして都市空間だけでもない。ブランド品を着ている人は，どこにいようとも，ロゴマークが見えるかどうかを問わずにブランド品の広告に協力していることになる。そうしたことが日常的に，疑いもなくなされるようになった時代相の変化を，田中康夫の小説は踏まえ、注の形式で直示している。

84●マンシング　ゴルフ，テニス・ウェアのブランド
112●ラコステ　ポロ・シャツで人気のある，ワニのマークのブランド
（田中1985：29, 35）

「物」はまず使用価値で必要とされた。たとえば寒さを凌ぐために衣服は寒暖差に適用できなかった人間という種の弱さを補う必要「物」として生み出され，着用された。だが，「物」への要求は次第に過剰になってゆく。歩行の速度を超えて移動するために開発された「自動車」は，他のいかなる動物にも与えられなかった速度での移動を可能にする。こうした「物」の使用によって人間は生活環境を，その自然なバランス状態を超えて変化させてゆく。単に欠如している能力を補うために「物」が使われるのではなく，環境

を「より」快適に，「より」便利に変化させるために「物」が求められ始めると，もはやそこに際限がなくなる。

ペレックはそうした歯止めが失われた状況を描いた。しかし，そこにペレックが意識しなかった，もうひとつの変化が進行していった。「物」が普及し，余りあるようになると「物」の中での取捨選択が起こるようになる。その時，使用者は「物」を一般名ではなく，生産者名や，生産者がそれに与えた固有名＝ブランドを頼りに選ぶようになる。同じ寒さを防ぐ衣服でも，機能性が高かったり，確かな伝統を持っていたりして「より」高名なものが求められる。こうしていわゆる「ブランド主義」が成立する。

ペレックと田中の作品の間にはこうした「物」の存在様式の変化がある。『なんとなく，クリスタル』は全体としては江藤の言うとおり，若い女性が浮気してまた元の鞘に戻る「古風な情緒の」物語であり，取るに足らないものだ。しかし文章の中にブランド記号を挟み込むことで，その細部において「東京の都市空間が崩壊し，単なる記号の集積と化した」現実を示した。

こうして小説スタイルを借りて現実を描写した『なんとなく，クリスタル』を「リテラリー・ジャーナリズム」のヴァリエーションとみなすことができるだろう。田中がジャーナリズム指向を持っていたことは，後に小説ではなく，取材の経過をストレートに書くルポルタージュを週刊誌に連載したことからも窺える。

> まだまだ，随分と先の話ではありますけれど，たとえば，今年の十二月二十五日の朝，十一時過ぎぐらいに，シティホテルのロビーへ，ノコノコとお出かけしてみたら，あなたは，きっと，びっくり仰天しちゃうでしょう。
>
> なぜって，ラルフ・ローレンやポール・スティアートのブレザーを着た大学生の男の子たちが，チェック・アウト・カウンターに，長い行列を作っているのですから，
>
> 一応，まだ二十八歳になったばかりで，しかも，日頃，大学生の男の子や女の子たちと一緒に，六本木や広尾あたりでお茶してる，この僕でさえ，それは，一瞬，ギョッと思ってしまう光景，であります（田中1988：10）。

『トーキョー大沈入』巻頭に収められた「シティホテル」の章からの引用だ。文体は『なんとなく，クルスタル』と変わらない。商品名は容赦なく本文を侵食している。しかし今回はメッセージがより直截に語られる。

> 「欧米のホテルとは，こんなものでござあい，と，日本の皆々さまに教えてあげましょう」という姿勢を，ホテル側が取ってくれると，お客の方も，安心しちゃえます。知的，とか啓蒙的という衣装をまとってしまうと，どんなにペダンティックな代物でも，貴いって感じに思えてしまう，悲しい動物が，私たち日本人であります。
>
> そうした衣装をまとっていれば，たとえ，チェック・アウト・カウンターで，フロントマンが後からきた外国人客の方を先に処理しても，別段，怒ることもなく済みます。ないしろ，欧米のホテルとは何ぞや，を教えていただく，ということになっているのですから，日本人である私たちとしては，そのホテルの中に入れていただけるだけでも有難いのです。（ibid.：16）

アメリカの豊かさを垣間見たがる若者たちの姿を描く筆致は江藤の見込みが間違っていなかったことを証しする。田中は，ファッション雑誌と同じく，商品のコードを流行のコードに結ぶ付けるシフターが多く紛れ込んでいる文体を使うが，彼の意図はもちろん商品広告ではなかった。そうしたシフターが成立する根拠自体，つまり今の豊かなブランド消費生活がどうして成立したかの出自を問題視するのだ。彼にとって二分法は〈ブランドを取るか，対米従属からの自由を選ぶか〉であり，クリスタルな生活を選んでいる限り，対米従属――加藤典洋2009のいう「アメリカの影」――からは逃れられないことが示されている。

ただし，その主張が告発の激しさを伴っていないことには留意すべきだろう。そうした田中の姿勢は，若者たちがブランドにまみれる生活を強制されたわけではない事情と対応している。少なくとも田中の注目する範囲に限れば，対米従属する若者たちに向けて，ルールに従わなければ罰せられるような前近代的な権力の行使は存在しない。経済成長を遂げた豊かな社会では必要以上に「物」が氾濫し，「物」の取捨選択が人々にとって必然化する。選択には美意識や価値観が求められることから，どのブランドを選ぶかが自己

表現の手段となる。自己表現を通じて自己実現を求める現代人はブランドを選ばなければならない。こうして自己実現を求める自発性の中でブランド消費が方向づけられ，良きブランド選びのためにブランド消費社会として先行する欧米社会に範が求められる。そこに，そうしなければ殺すと脅すような権力はない。あるのは，フーコーの概念装置を用いれば，相手の自発性を誘発しつつ（それゆえに支配される実感もなしに）管理する「生権力」の発現なのだ。

対米従属がこうした生権力的な支配の構図を担い始めていた80年台の状況を，70年代に成立した専業的ノンフィクション作家たちは描くことができなかった。それは彼らの多くが学生運動世代であり，世界中に覇権を及ぼすアメリカの帝国主義への激しい告発と日本の対米従属の記述をセットでしか扱わなかったからだ[2)]。そうしたイデオロギー的世界認知は，生権力による支配を受け始めた社会の実相を見ることを妨げた。とはいえ問題は書き手の側だけにあったのではない。読み手の期待に応えることが職業作家の使命であり，そうである以上，書き手は読者に縛られる面がある。生権力的状況を読みたがらなかった読者もまたそこに共犯関係を結んでいる。読者が望まない限り，市場原理に縛られた商業出版の世界で新しい「ノンフィクション」は生まれにくい。そこに「ノンフィクション」が固定化する流れが用意され，高度消費社会の実相を「ノンフィクション」が描けず，むしろ小説家である田中康夫が小説であることを利用してそれを描けた理由が存在している。

１－３　ケータイ小説

むしろフィクションの側が様々な迂回路を利用しつつ現実を巧みに描き出した事例は田中以後にも幾つかも見られた[3)]。ここでは田中と似た，全体において陳腐な物語でありつつ，細部に現実を直示する記号を配置しているフィクションとしてケータイ小説に注目したい。

ケータイ小説のルーツは Yoshi が個人サイト上で2000年に連載した『Deep Love』だという（本田2008：cf. 31）。これが話題になり，出版もされた。本田透はこれを「第一次ケータイ小説ブーム」と呼ぶ。その後，携帯サイト「魔法の i ランド」に投稿された素人の手による小説が人気を集め，Chaco『天使がくれたもの』を皮切りに次々と書籍化された。これが「第二次携帯小説ブーム」である。第一次と第二次の作品は大きく異なっており，Yoshi

はケータイコンテンツの開発に関心があるメディアプロデューサーであり，ケータイを使って利用者の声を拾い集めつつ小説のかたちにまとめていった。しかし第二次ブームの担い手たちはChacoを筆頭に自分自身の体験を小説として書いた。こうした実体験を描く第二次ブームの作品を本田は「リアル系ケータイ小説」と呼ぶ。

これらのリアル系ケータイ小説を小説とみなすべきかについては議論があった。そこには心理描写も情景描写もなく，ただ性的な経験が赤裸々に綴られているだけだという批判は田中『なんとなく，クリスタル』が発表された当時の酷評を彷彿させる。これについて中西新太郎は次のように書いている。「『これが小説なのか』という疑問が生まれる理由は，稚拙な表現や『文体』（むしろ文体への無頓着）から始まって多々挙げられるが，ここでは『ベタな物語』であるという一点にしぼってケータイ小説の特徴を考えてみたい。ベタとは，さしあたり，世界にたいする一重の――両義性や迂回や韜晦といった要素を排除した――振る舞いや感情のあり方を指している」「ケータイ小説にあっては，恋愛感情の一致も不一致も，葛藤や矛盾を孕む複雑な陰影を持たない」「任意の作品をひもとけば，表現上でも，言葉のエコノミーと言ってよいほどの，身も蓋もない単刀直入の表現が繰り返される」（中西2008a：6 f）。

こうした特徴によってケータイ小説は従来の小説を読み慣れた読者から強い違和感を持たれた。それは同じジュヴナイル小説であるライトノベルとも異質であり，ライトノベルはむしろ韜晦な感情表現を特徴にしていた[4)]。そうしたライトノベルの個性は従来の小説読者や評論家にも理解可能であり，中には文学賞を獲得した作品もある。しかしケータイ小説はそうした評価の埒外に置かれてきた。

では，リアル系なので「ノンフィクション」なのかといえばそこも危うい。たとえば第二次ケータイ小説ブームを大きく牽引した『恋空』は携帯サイトでの連載中は「事実であること」を売りにしていたが，書籍化され，版を重ねるにつれて「事実をもとにしたフィクション」という記述に変わった（速水2008：cf. 082）。要するに「フィクション」にも「ノンフィクション」にもその居場所は用意されていない。しかしそんなケータイ小説にも，現実を先鋭に映し出す「細部」が存在している。濱野保樹は『恋空』の次の部分に注目する。

それ以来，毎日のようにノゾムからは電話やメールが届いた。
美嘉の通っていた高校では当時はまだ“携帯電話”を持ってる人が少なく，ほとんどの人が“PHS”を使っていた。
“PHS”にはPメールとPメールDXという機能がある。
Pメールとはカタカナを15文字前後送る事が出来る機能で，
PメールDXとは今の携帯電話のように長いメールを送る事ができる機能だ。
重要な内容ではない限りPメールDXは使わない。
ほとんどはPメールを使用していた。
ノゾムから届くメールは，毎回と言っていいほど同じ内容だ。
《ゲンキ？》《イマナニシテル？》（美嘉2006：17f）

このように本文の中に突然現れ，文体的な破綻をもたらしかねない携帯電話のスペックに関する説明的記述が，実はケータイ小説の中で重要な役割を果たしていると濱野は考える。というのも『恋空』で「ノゾム」は15文字以下のPメールばかり送ってくる相手として描かれる。それに対して本当の恋人になる「ヒロ」は音声電話で感情の機微を含めて話す相手として登場する。このようにそこでは登場人物がメディアの使い方によって象徴されて描かれている。他にも「『恋空』のなかには，至るところでこうしたケータイにまつわる『選択』や『判断』に関する記述がでてきます。…つまり『恋空』という作品は，そのときケータイをどのような『判断』や『選択』に基いて使っていたのかに関する『操作ログ』の集積としてみなせるのではないか。そして読者の側は，そうした操作ログを追跡することを通じて，その場その場で登場人物たちの心理や行動を『リアル』だと感じることができるのではないか」（濱野2008：283f）。

ブランド記号を，現実社会を直示する「窓」を開くように小説の文体の中で用いた『なんとなく，クリスタル』と同じく，ケータイ小説は「操作ログ」を描き込んだ細部によってケータイの利用方法によって浮かび上がるリアルな人間関係を描いた。それは，その方法を用いることでしか描き出されることのない，ケータイ時代の現実であり，その限りにおいてケータイ小説はジャーナリズム機能を担っているのだ。

しかし，そのリアリティを単調な小説作品の中から読み取るリテラシーを身につけているのは，同じようなケータイ文化に浸かっている読者に限られる。ケータイに通じていない読者には操作ログ記述の重要性が理解できない（『なんとなく，クリスタル』のように「注」もない）ため，ケータイ小説にリアリティを感じる手がかりすら用意されていない。その意味でケータイ小説は限定された「リテラリー・ジャーナリズム」だとも呼べるだろう。

一方でそこには欠けているものもある。ケータイ小説には心理描写や情景描写だけでなく固有名詞もまた出てこない。小説に登場するクルマは「白い車」「シルバーの車」としか描写されない。地名も不在だ。『恋空』の舞台は名もない地方都市であり，そこに出てくる地名は修学旅行で訪れた「東京」「ディズニーシー」「大阪」「USJ」だけだ（速水2008；cf. 019）。あたかもペレックの世界に戻ってしまったかのようだ。

フィクションの中に現実を直示する回路を開くという同じ「リテラリー・ジャーナリズム」の手法で書かれた『なんとなく，クリスタル』と『恋空』だが，そこに描かれた世界はあまりにも異なる。それぞれが成立した約20年間の時差の中で，日本社会に「相転移」をもたらすような大きな変化が訪れたことを，両作品は「リテラリー・ジャーナリズム」として示しているのだろう。これについても後段に議論したい。

２．日本の「アカデミック・ジャーナリズム」

２－１「郊外」の発見

奥出直人はアメリカの「リテラリー・ジャーナリズム」の担い手であるトレイシー・キダーやジョン・マクフィーが大学で教鞭を取っていることを指摘している（奥出1988：185f）。アカデミズムの世界に籍を置く者が行うジャーナリズム活動を「アカデミック・ジャーナリズム」と呼ぶなら，「リテラリー・ジャーナリズム」は「アカデミック・ジャーナリズム」でもあったことになる。同じように物語的な表現形式を主に用いつつも，ニュージャーナリズムのような激しさを持たず，奥出のいうようにむしろ記述の正確さを重んじ，語り手としての責任を淡々と果たそうとする誠実さがアメリカの「リテラリー・ジャーナリズム」の特徴だとすれば（ibid.：cf. 185），それは大学教員によって担われることと少なからぬ関係があると思われる。作品の売上以外の収入があれば，奇をてらった表現で読者の眼を惹こうと焦るこ

ともなくなるし，多くが大学でジャーナリズムを教えているので，むしろ後進の眼を気にして模範的な取材と表現を心がけるようにもなるだろう。

こうして80年代のアメリカで「リテラリー・ジャーナリズム」を派生させることになる「アカデミック・ジャーナリズム」であるが，そのルーツはより古い時期にまで遡れる。たとえばその先駆としてシカゴ大学で展開されてきた都市社会学の調査と成果公開を思い浮かべることが出来よう。1914年に11年間に及ぶジャーナリストとしての経験を経てドイツに留学，ジンメルの指導を受けた後，50歳にしてシカゴ大学社会学部に迎えられたロバート・パークは，しばしば学生に語ったという。「…もう一つどうしても必要なものがあるんだ。自分の目で見ることだよ。一流ホテルに出掛けていってラウンジに腰掛けて見なさい。安宿のあがり口に腰を下ろしてみなさい。ゴールド・コーストの長椅子やスラムのベッドに腰を下ろしてみなさい。オーケストラホールやスター・アンド・ガーター劇場の座席に座ってごらんなさい。要するに，諸君，街に出ていって諸君のズボンの尻を『実際の』そして『本当の』調査で汚して見なさい」（中野2003：16f）。

この激を受けて街に送り出された大学院生たちはシカゴという都市のフィールドワークを行い，学位論文を書いた。それらのうち多くが，シカゴ大学初代学長ハーバーの肝いりで設立されたシカゴ大学出版局から出版された。その作品は1923年刊行のネルス・アンダーソンの『ホボ』を皮切りに，ポール・クレッシー『タクシー・ダンス・ホール』，ハーベイ・ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』などジャーナリスティックな関心を集め続けた[5)]。その影響は現代まで及んでいる。シカゴ大に学んで参与観察による都市社会学研究を始めたイライジャ・アンダーソンはペンシルバニア大学に移った後に，都市周縁部のコミュニティ崩壊と再生を描いた『ストリートワイズ』を90年に刊行している。この著書は新聞の書評欄でも取り上げられ，アメリカ社会変容の現状を知りたがる人々の広い関心を集めてジャーナリスティックな話題を読んだ。

こうした「リテラリー」抜きの「アカデミック・ジャーナリズム」であれば日本にも例がある。たとえば大宅壮一ノンフィクション賞受賞者の中にも袖井林次郎や野田正彰のような大学研究者が含まれる。占領期研究の画期となった袖井『マッカーサーの2000日』（1974，中央公論社）はアカデミックな研究書としてのレベルを維持しつつ，ジャーナリズムの世界で話題を呼ん

だし，野田正彰『コンピュータ新人類の誕生』（1987，文藝春秋）はアメリカの「リテラリー・ジャーナリズム」の傑作とされるキダー『超マシン誕生』と同じく，デジタル技術によって変貌しつつある人間像を精神科医らしい聞き取り調査によって描いた作品だ[6)]。そして先に挙げたアンダーソンと匹敵する仕事を，ほぼ同じ時期に行ったのが宮台真司であった。都立大学人文学部助教授（当時）の宮台が日本全国をフィールドワークして書いた作品が『制服少女たちの選択』だ。その作業を通じて伝統的な「都市」でも昔ながらの「田舎」でもない「郊外」と呼ぶべき空間が都市周縁部に新しく広まっていることを彼は示した。

> 「秘密」や「孤独」といった主題に似つかわしさからみると，郊外は都市に似ているようも見える。たしかに都市も郊外も，伝統的な地域共同体の縛りから自由な空間であるという点は同じであり，また生産というよりもむしろ消費に特化した場である点でも共通している。しかしながら両者には決定的なちがいがある。都市にはディスコがあり，クラブがあり，カラオケボックスがあり，ゲームセンターがあり，お見合いパブがあり，ライブハウスがある。そこでは，しつらえられた演技空間の中での匿名的なコミュニケーション――ナンパ・コンパ・紹介――が成り立つ空間である。昔風の言い方をすれば，「同類をもとめる若者たち」がつどい，「いっときの疑似的な共同性」を生きることができる。ところが郊外には，都市に存在するようなこうした「隠れ家」がなく，そうした「隠れ家」においてしか開かれないコミュニケーションチャンスが存在しない。郊外は，伝統的共同体と都市的空間とも異なった，いわばコミュニケーションチャンスから「二重に疎外された」空間なのである（宮台1994：102f)。

こうした「郊外」の成立の中で「『居場所』を失ったまま宙づりにな」った少女たちは「都市的現実」に吸い寄せられてゆく。それが当時，社会問題化していた電話風俗等に彼女たちを走らせる構図だと宮台は考えた。注目すべきは，そこで繰り広げられるコミュニケーションについて宮台がこう指摘していたことだ。「『電話風俗』のなかでは，どんな男も女も唯一的な個体として現れることができない』『たとえ悩み相談であっても「わたしだけがわ

かる〈わたし〉』や『あなただけがわかる〈わたし〉』が登場することはない。そこに広がるのは，一般化された記号だけから成り立つ『平坦な世界』である」（ibid.：105f）。

もちろん，そこには風俗独特の匿名性が働いている。風俗産業での出会いは，それぞれの人生を背景にした必然的なものではなく，業者によって用意された場で面識のない両者が巡り遭う，刹那的なものだ。そこでプライバシーを明かすわけにもゆかない。だが，それでもコミュニケーションを続けるためには相互に了解できる記号を媒介に語るしかない。かくして『なんとなく，クリスタル』の文体がそのまま会話に横滑りする。ブランド記号が示す現実を手がかりにかろうじて社会性を維持するコミュニケーションが繰り広げられる。

それは「電話風俗に固有なものではない」と宮台は書く。「それは，車・ファッション・お立ち台をもちだすまでもなく『都市的なもの』一般に見出されるものである。はなやかな街は，どんな出会いもふるまいも偶発であるほかない「偶発性としての都市」であると同時に，すべての出会いやふるまいが平坦な記号として現れるしかない「記号としての都市」でもある。『電話風俗』やそれが開く『都市の相貌』にひきつけられる少女たちは，この個別性を抹消された『平坦な世界』に，まるでカメレオンのように自らの身体をまぎれこませようとしているのだ」（ibid.：106）。

田中が記号の集積に成り果てたと看破した「東京」は，宮台の調査時には「郊外」に伝播していた。しかしそんな「郊外」がケータイ小説の担い手たちが生きる場所になるまでにはまだ時間が必要であった。

２－２　格差社会の発見

宮台の仕事が示した「郊外」とケータイ小説の舞台となる「地方都市」の間に走る亀裂を明らかにしたのが佐藤俊樹『不平等社会日本』（2000）だった。東大助教授（当時）だった佐藤は社会学者ならではの強み，つまり一般マスメディア・ジャーナリストには望みようもない強力な調査力と分析能力を駆使する。佐藤が用いたのは社会学者たちによって実施されて来た「社会階層と社会移動全国調査」だ。佐藤はその調査結果を分析し，高度経済成長によってホワイトカラー管理職の絶対数が増えて他の層から流入しやすくなったことが，一時的に階層の開放性，つまり親の社会的地位（ホワイトカラ

ーで管理職であることなど）を子供が「引き継ぐ」確率を下げ，頑張れば階級を超えて出世できる「夢」を抱かせたが，日本社会はその後，急速に階級「閉鎖的」な社会に戻ったことを示した。この指摘は日本が「一億総中流」社会であると信じてきた世間の「常識」を覆し，ジャーナリズムの世界でも大いに話題を呼んで格差社会論の嚆矢となった[7)]。

高度経済成長の終焉後，日本社会は格差化を深めてゆく。佐藤が示したように日本社会の階級開放性は急速に失われて行き，貧しい家庭の子女は十分な教育機会を得られず，エリート層に成り上がることができずに貧困層に留まる。消費力に乏しい彼らは地方都市に出店してきた大型スーパーマーケットやコンビニで，どこにでも同じように安価で売られている商品を必要に応じて買うしかない。そこにブランド名が存在しない一般名詞消費の再来があり得る。95年の阪神大震災，地下鉄サリン事件発生が大きなきっかけとなって社会に対する体感的不安が強まり，他にゆく場所もなくスーパーやコンビニでたむろする下層の若者たちを潜在的な犯罪予備軍として恐れる風潮も用意される。中西はこう書く。

> 労働諸階層の全体にわたる生活・労働困難の拡大こそは，95年に始まった変化の至上の現実 paramount reality であった。…社会・生活意識におけるこの時期の変化もまた急激であった。…社会意識上の変化という点では，青少年の孤立・排除感覚がとりわけ象徴的である。「保護すべき対象」から「不気味で危険な存在」へと社会・政策的な位置づけを変えられた青少年の徹底した孤立感は諸外国に比してきわだった姿をこの時期，示すようになる。…もちろん，孤立を強いられるがゆえの「防御反応」である特異な集団化（群生体化）もまた，同じ現実に対する両義的反応として出現する（中西2008：18f)。

こうして疎外された地方都市＝郊外の若者にとって群生体化のメディアがケータイであった。ケータイは生活必需品であり，手に入れてしまえばパケット定額制のおかげで彼らにとって利用料金を気にせず使える貴重な道具となった。自由になるものは生身の身体とケータイしかない生活はこうして成立し，生々しい体験をケータイで綴るケータイ小説が，格差化の現実を下層から描き出すことになる。

八〇年代ラブラブの恋愛物語とはっきり異なるのは，ケータイ小説が格差社会の低層部を生き抜く恋愛物語であるという点だ。語られるトピックのえげつなさ，浮薄な印象とはうらはらに，ケータイ小説は恋人同士の守り守られる安定を求める。無軌道で行方の知れぬ恋の追求などでは決してない。結婚すら社会的に困難となった構造改革時代の「下層の青春」に焦点が合わされている以上，それは当然のことである。…陳腐な定型を踏んでいるかにみえるラブストーリーの背景には，社会科学上は貧困という無粋な用語で把握される大衆的生の困難と階層的分裂とが見え隠れしている（中西2007：197f)。

２－３　相互承認と内地植民地化

「アカデミック・ジャーナリズム」はこの後も変化する社会の実相に迫り続ける。たとえば古市憲寿は『希望難民ご一行様』で世界平和の実現を目指してピースボートに乗る若者たちを対象に参与観察調査を行い，同乗する仲間と相互に認め合う承認を経て平和実現の理念を忘れてしまうプロセスを浮き彫りにする。この相互承認の構図も「防御反応としての群生体化」の変種だろう。次作『絶望の国の幸福な若者たち』では，相互依存の共同性が葛藤や理念を冷却してゆくプロセスが，ピースボート乗船者を超えて社会的に広く存在していることが確かめられる。そこで古市が駆使する武器のひとつが佐藤と同じく統計分析だ。たとえば内閣府の2010年の意識調査で二十代男子の65. 9%，同女子の75. 2%が現在の生活に満足していると答えている。こうして統計的にはかつてないほどに自分は満ち足りている，幸福だと感じているらしい若者世代が，しかし，同じ調査で「生活の中で悩みや不安があるか」と尋ねられると63%が YES と答える。幸福にして不安，この矛盾した心理を説明する概念も相互承認であり，悩みはあるのだが，とりあえず誰かと繋がっていられれば幸福に感じる。こうした刹那的な幸福感の中で，未来に予測される困難や，現状の問題の解決は先送りされ続け，階級差や疎外状況が固定される事情を，多くの統計資料を駆使し，また社会学者たちの先行研究を縦横に利用しつつ古市は浮き彫りにしてゆく。こうした仕事が評価され，古市はテレビメディアでもコメントする機会が増えている。

古市と同じく東大で社会学を学ぶ開沼博も「アカデミック・ジャーナリズ

ム」と呼ばれるにふさわしい仕事を続けている。原発事故が起きる直前の福島の原発立地地元，つまり地方の原子力ムラでフィールドワーク調査をした彼の修士論文は改訂されて『フクシマ論』として刊行された。そこでは農林漁業を中心に自給自足的に成立してきたムラ，つまり，それ自体独立してきたムラが，戦時下において国家の総動員体制に組み込まれ，戦後もその服従関係を続ける様子が描かれる。中央の都市で処理できない問題は，戦争中のように外部の植民地に受け入れさせることもできなくなり，結局，地方のムラがその引き受け先として動員される。ムラから労働力が搾取され，ムラは各種の汚れ仕事の受け入れ先となる。とはいえ，こうした動きは強制によるものではない。「その背景にあったのは，成長を望むムラの欲望に他ならない。中央から示される開発の計画，他のムラと自身のムラとの比較，マスメディアが映し出す成長の華やかさ，そういったものがムラの欲望を支えていった」（開沼2011；325）。そこにもまた生権力の作動を見ることが出来るだろう。こうして原発が地方に偏在することになるプロセスを，長期間に及ぶ丁寧な聞き取り調査と，ポストコロニアリズム研究で確立されてきた分析枠組を利用して明らかにした仕事は，既存ジャーナリズムの原発記事とは比べ物にならない骨太の調査報告として話題を呼んだ。

こうした「アカデミック・ジャーナリズム」の台頭は，失くしたものを蘇らせる。かつて筑摩版『世界ノンフィクション全集』がその編集過程において，たとえばレオポルド・インフェルト『神々の愛でし人』が担っていた豊かな科学的分析を捨象し，それが結果的に日本の「ノンフィクション」を文芸的な性格に偏らせた経緯を筆者は示した（武田2011：15f）。最近の「アカデミック・ジャーナリズム」はそこで置き去りにされた科学的分析を再びジャーナリズムに取り戻そうとしているかのようだ。『漂白される社会』（開沼2013）で開沼は自分の仕事について書いている。「本書の内容は私が二〇〇〇年代の後半から現在までに，ライターとして活動しながら続けた，様々な『周縁的な存在』を対象としたフィールドワークに基いて展開されている。本書で扱うようなテーマは，ジャーナリズムで扱われるべきもののようにも思えるだろう。しかし一方には，産業として縮小し，新たな形を模索しながらも，小さからぬ機能不全な顕在化しつつあるジャーナリズムがあり，他方ではやはり，大学という制度自体の変革を求められながら，瑣末なテーマや世間の関心から距離のあるテーマばかりを追いがちになりつつある

アカデミズムがある。そのなかで，両者の『橋渡し』を行い，学問的方法論をジャーナリスティックな対象に適用する必要性が高まっていると私は考える」（ibid. 2013：6 ）

この言葉に，戸坂潤が1931年の『思想』に書いていた内容を想起せずにはいられない。アカデミズムが皮相化しがちなジャーナリズムを基本的な労作に向かせ，逆にジャーナリズムは停滞に陥ろうとするアカデミーを刺激して時代への関心に引き込む（cf. 戸坂1966：150）。そんな両者の関係が得られることで，硬直した「ノンフィクション」が再び活性化され，新しい調査と表現の地平を開いてゆくことに期待したい。

注

1）文藝賞受賞時。単行本刊行時には442個に増えている。

2）逆に言えば70年代的な枠組みでは田中の評価もできなかった。加藤2013には古い枠組みで田中を批判しようとする津村喬の批評が取り上げられている。

3）たとえば緻密な取材をもとに小説を描く高村薫のような作家も登場したが，ここではそれとは別の新しい動向として真鍋昌平『闇金ウシジマ君』などコミックにも注目しておきたい。難波功士は同コミックを社会の成り立ちを学ぶ格好のテキストと考え，『社会学ウシジマくん』（2013, 人文書院）を刊行している。現実を「調べ，報じる」と社会的にオーソライズされたメディアは硬直化を来し，新しい社会の動向に追随不能となる。その結果，ノンフィクションからフィクションへ，文字媒体からコミックへと新しい現実を報じるメディアは常に横滑りしてゆく。そんなプロセスが2000年代半ばに本文で議論されるケータイ小説に至ったという説明も可能だろう。

4）哲学者・東浩紀はライトノベルに現実を描写するリアリズムを見ており，「ゲーム的リアリズム」として概念化している。

5）佐藤郁哉は著書『フィールドワーク』（1992, 新曜社）でクレッシー，ゾーボーの作品を「良質のルポルタージュと比べても遜色が無い」と評している。

6）ここでは大学研究者がジャーナリズムの領域で仕事を行うこととして「アカデミック・ジャーナリズム」を考えているが，逆の方向もある。たとえば山根一真の『変体少女文字の研究』（1985, 文藝春秋）はアカデミズムでも通用する定性調査と定量調査を立体的に組み合わせる方法を駆使し，若い世代の動向を浮き彫りにした。こうしたジャーナリズムからアカデミズムへの接近も「アカデミック・ジ

ャーナリズム」のもうひとつの側面としてある。

7）本論執筆に際して『不平等社会日本』の担当編集者にヒアリングをしている。彼はフィールドワークを踏まえる宮台の仕事に「現実と切り結ばない学者」「上から目線で規範的な評論家」に対する批判意識を感じて共感し，宮台が共著者代表を務めた『ポップコミュニケーション全書』（1992, PARCO 出版）を読んでそこに寄稿されていた佐藤の論文にも興味を覚えて執筆依頼に至ったという。彼自身「アカデミシャンにはなるべくやわらかく，（ジャーナリスティックに），逆に市井のライターには，なるべく精緻な手続きを踏んで学者・評論家の世界にも通じる言葉の本をつくること」を編集作業上のモットーとしていると述べており，「アカデミック・ジャーナリズム」が出版社サイドでも求められていた事情を窺わせる。

参考引用文献

アンダーソン，イライジャ 2003『ストリートワイズ』奥田道大・啓子訳　ハーベスト社

江藤淳 1988「三作を同時に推す」（昭和55年度文藝賞選評『文藝』1980年12月号掲載）

江藤淳・蓮實重彦 1985『オールド・ファッション――普通の会話』中央公論社

奥出直人 1988「消費社会の綱渡り――ヤッピー生活誌としてのリテラリー・ジャーナリズム」（『ユリイカ』1988年11月号所収，青土社）

開沼博 2011『フクシマ論』青土社

2013『漂白される社会』ダイヤモンド社

加藤典洋 2009『アメリカの影』講談社文芸文庫

北田暁大2011『広告都市・東京―その誕生と死』ちくま学芸文庫

キダー, トレイシー 2010『超マシン誕生』糸川洋訳　日経 BP 社

佐藤俊樹 2000『不平等社会日本』中央公論新社

武田徹 1989『紛い物考』CBS ソニー出版

2010「「ノンフィクション」は社会科学の方法たりえるか――「ニュージャーナリズム」期前後の沢木耕太郎の作品分析を通じて」（『恵泉女学園大学紀要』第22号所収）

2011「「ノンフィクション」の生成――筑摩書房版『世界ノンフィクション全集』の史的位置づけ」ibid. 第23号

田中康夫 1985『なんとなく，クリスタル』新潮文庫

1988『トーキョー大沈入』文春文庫
戸坂潤 1966「アカデミーとジャーナリズム」(『戸坂潤全集第三巻』勁草書房所収)
中西新太郎 2007「自己責任時代の〈一途〉を映すケータイ小説」(『世界』2007年12月号所収，岩波書店)
2008a「読者を後押しする〈誰でもない誰か〉の物語」(『国文学』2008年4月号所収，学燈社)
2008b『1995年』大月書店
中野正大，宝月誠篇 2003『シカゴ学派の社会学』世界思想社
野田正彰 1987『コンピュータ新人類の誕生』文芸春秋
濱野智史 2008『アーキテクチャーの生態系』NTT出版
速水健朗 2008『ケータイ小説的――再ヤンキー化時代の少女たち』原書房
バルト，ロラン 1972『モードの体系――その言語表現による記号学的分析』佐藤信夫訳，みすず書房
古市憲寿 2010『希望難民ご一行様』光文社
2011『不幸な社会の幸福な若者たち』講談社
ペレック，ジョルジュ 2013『物の時代，小さなバイク』弓削三男訳，文遊社
本田透 2008『なぜケータイ小説は売れるのか』ソフトバンク新書
美嘉 2006『恋空』スターツ出版
宮台真司 1994『制服少女たちの選択』講談社
ラウリー，マルカム 1966『活火山の下』加納秀夫訳　白水社